

特集趣意 新聞メディアと文学 明治20年代

松原真

近代日本における小説の歴史は、新聞メディアにはじまる。明治一〇年（一八七七）、最後の内戦である西南戦争が終結すると、新聞メディアは紙幅を埋める必要と読者を惹きつけるための新たな商品開発の必要に迫られた。その結果、雑報を物語的に長編化した続き物——新聞小説の源流——が掲載されるにいたったのである。この続き物は単行本化されベストセラーとなり、そののちは続々と、小説が紙面を飾り、小説本が出版される状況となる。すなわち、新聞メディアこそが、沈滞していた小説というジャンルを復活させたのである。

近代日本初期はまた、文学を経世済民の事業と見なす価値観が強くある時代であった。新聞メディアは、この文学思想を實行するための場所でもあったのである。漢文訓読体の格調高い文章で発表された社説は、西洋列強に伍して日本国を独立・発展させるという熱意と気概に満ちあふれていた。啓蒙家にとって、文学とは社会的に無益なものであってはならず、日本国のあるべきすがたを同時代に提起するものでなければならなかった。このとき、新聞メディアこそが、そのビジョンを広く周知するための有力な手段とみなされたのである。

明治二〇年代は、小説が文学の首座を獲得していく過程の最初期に当たっている。西洋翻訳小説や政治小説の叢生、そして坪内逍遙の登場などにより、小説の地位は劇的に向上し、文学の中心を小説（写実小説）と見なす思想が強くなっていく。一方、この時代は、前述のように文学を経世済民の事業とする思想が色濃く残っている時代でもあった。このような空間において、新聞メディアあるいは新聞人は何を思い、いかなるふるまいをなしていたのか。本特集ではこれを問題とする。

付記 紀要「人文・自然研究」第一三号に掲載の拙稿「小説隆盛と新聞メディア」もご覧いただけると幸いである。